

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 32, No. 2 神奈川県立生命の星・地球博物館 Jun. 2026



水中を泳ぐハンドウイルカ *Tursiops truncatus* (Montagu, 1821)

横浜・八景島シーパラダイスにて撮影

にしむら ふたば
西村 双葉 (学芸員)

ハンドウイルカは南北両半球の熱帯域から温帯域に広く分布する鯨類(クジラの仲間)の一種です。国内での飼育数も多く、ショーでのジャンプの印象が強いかもしれませんが、野生下でもアクロバティックな行動が観察されます。成体の体長は1.9~3.8 mと、個体群によって異なります。背中の中ほどにある三角形の背ビレ、丸みを帯びた前頭部、クチバシのように伸びた口(吻)を持ち、典型的なイルカの外見をしています。

鯨類はその姿から魚類(特にサメ類)

と間違われることもありますが、私たちと同じ哺乳類であり、肺呼吸を行い、母乳で仔を育てます。魚類との違いは泳ぎ方にも見られ、魚類は尾ビレを左右に振って泳ぐのに対し、鯨類は尾ビレを背腹(上下)に動かします。このため、鯨類の尾ビレは左右方向に広がった形状をしています。また、呼吸は背側にある鼻を水面に出して行っています。水族館等で鯨類を見る時には、可愛らしい仕草だけでなく、泳ぎ方や呼吸の仕方にもぜひ注目してみてください。

里山で哺乳類を調べる意味 ―カメラが映す現状と課題―

すずき さとし
鈴木 聡(学芸員)

里山とはどんな場所？

「里山」という用語自体は江戸時代からありましたが、現代においては、1970年代に四手井綱英が「農用林や薪炭林」と定義したことを契機に、生態学や環境保全の分野で定着しました。その定義は時代や地域によって多岐にわたりますが、ここでは「人の手が入った二次林と、それに隣接する農地や水辺等が一体となった環境」と定義して話を進めます。多くの里山では1960年代以降の燃料革命や過疎化による荒廃が進んでいますが、一方で近年は生物多様性保全の拠点として価値が再認識されつつあります。

里山の哺乳類を調べる

現在、里山に生息する動植物の多くが国や神奈川県レッドリストに掲載されており、絶滅が危ぶまれています。2006年版の県レッドデータブックでは、里山に生息する哺乳類のうち、カヤネズミ、ニホンイタチ等5種がNT(準絶滅危惧)に選定されています。ほかの分類群に比べるとリスト掲載種数は少ないものの、神奈川県に在来陸棲哺乳類は約40種であり、割合としては決して少なくありません。里山では選定種以外にムササビやニホンノウサギ等の確認地点が減少傾向にあることから、絶滅リスクが高まっていると考えられています。

筆者は2019年から秦野市内の里山に生息する哺乳類の生態調査を行ってきました。2023年からは総合研究「神奈川県に在る里山環境における哺乳類及び鳥類相解明の試み」の一環として、自動撮影を主体とした調査を行っています。

なお、秦野市の市街地を取り囲む渋沢丘陵や丹沢山地の山麓部の数か所は、「秦野市域内の里山」として、環境省の生物多様性保全上重要な里地里山に選定されています。秦野市はこれらを含む7か所を「生き物の里」に指定し、環境保全を進めています。

カメラに写った里山の哺乳類

これまでの自動撮影調査で、計13種の

中大型哺乳類が確認されました(図1)。多くの地点でイノシシ、ハクビシ、タヌキが頻りに撮影されたのに加え、丹沢山地のふもとではニホンジカが数多く記録されており、まれにニホンカモシカも姿を見せました。自動撮影画像からの種同定が難しいネズミ類やコウモリ類も写っており、多くの種が里山を利用していることが分かりました。一方、近年全国的に里山への出没が増加しているツキノワグマとニホンザルは、今のところこの調査では記録されていません。この地域では外来種(アライグマ、ハクビシ)および大型哺乳類(ニホンジカ、イノシシ)の防除が行われていますが、依然として個体数は多いようです。なお、県東部で分布を広げている外来種のクリハラリスは、現在のところ確認されていません。

これからも調査を続けていく意味

秦野市の里山で自動撮影調査を本格的に始めてから3年が経ちました。これまでの調査により哺乳類の種数やおおよその生息数の目安が明らかになりました。しかし、里山の環境が変化し続けているため、今後の種構成や個体数は大きく変化する可能性があります。そのため、今後も哺乳類の生息状況をモニタリングしていく必要があります。

全国規模では、環境省の事業として市民参加型調査の「モニタリングサイト1000里地調査」が2005年から行われており、中・大型哺乳類を対象とした自動撮影を含め、植物相、鳥類、カエル類等全部で9項目の調査が実施されています。2024年には、18年間(2005～2022年)の調査のとりまとめ報告書が公表されました(環境省 自然環境局生物多様性センター, 2024)。日本自然保護協会によるデータの分析から、里山において生物多様性の損失が続いており、特に開けた環境に棲む種の減少が顕著であることや気候変動の影響等が見えてきました。哺乳類に関しては、アライグマ等の外来種や大型哺乳類(ニホンジカ、イノシシ)の分布拡大、良好な草原環境の指標種であるニホンノウサギや

カヤネズミの減少が明らかになりました。

全国的な生物多様性の変化の傾向と地域ごとの変化は必ずしも一致しませんが、比較することで地域特有の問題が見えてきます。秦野市の里山での調査をこれからも続けることで、里山の哺乳類の保全に繋がる知見が得られると考えています。

これからの人と里山の関わり方

1960年代の高度経済成長期を一つの転換点として、里山の資源を利用するくらしは全国的に縮小し、人間との関わり方は大きく変容しました。こうした関係性の変化は、里山の管理不足を招き、各地で生物多様性の低下という深刻な課題を生んでいます。生活圏のすぐそばに里山が位置していても、一度も足を踏み入れたことがないという方は少なくないと思います。里山には私有地も多いですが、県内には誰でも気軽に訪れることのできる公園等が点在しています。

現地で哺乳類の姿を直接見るのは難しいですが、足元をよく見ながら歩くことで、動物たちが通った「獣道」、足跡、糞等、生活の痕跡(フィールドサイン)を見つけることができるかもしれません。こうした痕跡を辿ることは、野生動物を知るための第一歩であり、動物たちのくらしを想像する貴重な体験となります。

筆者が野生動物の研究者を志した原点は、幼少期に里山で遊んだ際に芽生えた好奇心にあります。当時の心が踊るようなワクワクした実体験が、今も研究を続ける大きな支えとなっています。

知識として「生物多様性」を理解するだけでなく、実際に現地を歩き、自らの感覚で生き物の気配を探る経験には代えがたい価値があります。目の前の痕跡が「何だろう」と正体を突き止めようとすること、そして「なぜだろう」とその背景を推測すること。こうした実体験を通じて得られる問いや発見は、単なる情報の収集を超えて、自然への深い理解の土台となるものです。次世代を担う子どもたちにも、ぜひ里山に足を運び、五感を通じて未知なるものへの好奇心を大きく育ててほしいと願っています。そこでの発見

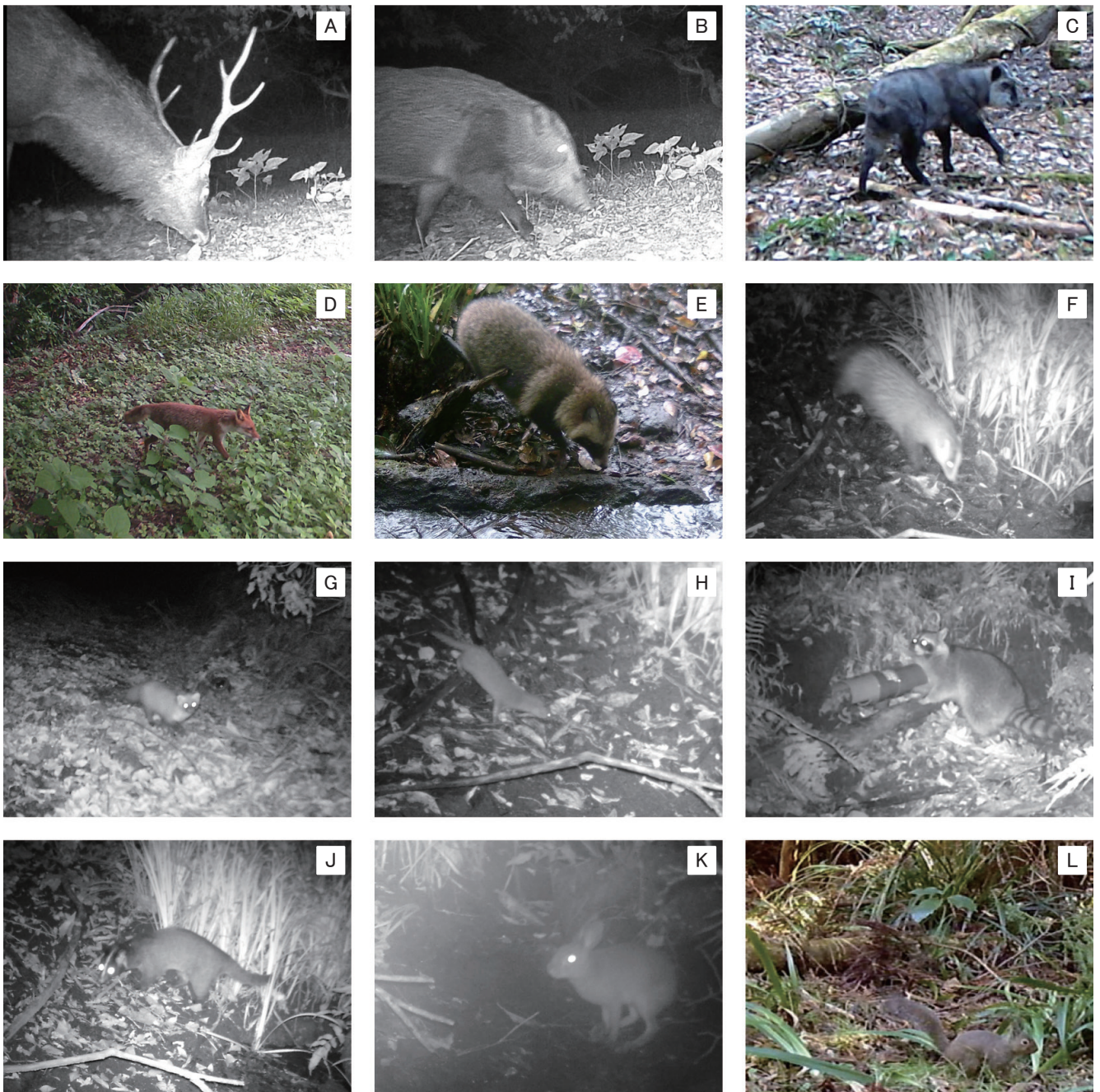


図1. 撮影された哺乳類。A: ニホンジカ *Cervus nippon*, B: イノシシ *Sus scrofa*, C: ニホンカモシカ *Capricornis crispus*, D: キツネ *Vulpes vulpes*, E: タヌキ *Nyctereutes procyonoides*, F: ニホンアナグマ *Meles anakuma*, G: ニホンテン *Martes melampus*, H: ニホンイタチ *Mustela itatsi*, I: アライグマ *Procyon lotor*, J: ハクビシン *Paguma larvata*, K: ニホンノウサギ *Lepus brachyurus*, L: ニホンリス *Sciurus lis*。この他にネコも記録された。

や驚きが、生き物を知る楽しさ、守る心へと繋がるはず。博物館はレファレンスや展示を通じて、そのきっかけ作りを全力でお手伝いしています。

これまでの調査から明らかになった里山の現状を紹介するため、特別展「しらべて分かった！里山にくらす動物たち」(開催期間: 7月18日(土)~11月8日(日))を開催します。本特別展では、神奈川県で里山に生息する哺乳類、鳥類をはじめ、両生類や爬虫類、魚類、

昆虫、甲殻類、植物、菌類等について、当館が行っている学術活動の成果を展示します。里山が生きものたちにとってどのような場所であり、またどのように変化してきたのかを剥製等の実物資料の展示や自動撮影画像のスライドショーにより動物たちの生き活きとした姿をお伝えします。

今回展示する資料の数々は、多くの方々の協力によって集められたものです。調査の実施にあたり、秦野市環境共生

課くずはの家、農業振興課農業支援・鳥獣対策担当(はだの都市農業支援センター)および当館哺乳類ボランティアの方々に心より感謝申し上げます。

引用文献

環境省自然環境局生物多様性センター, 2024. モニタリングサイト1000里地調査 2005-2022年度取りまとめ報告書. 13+153 pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.

小田原城址公園の石材

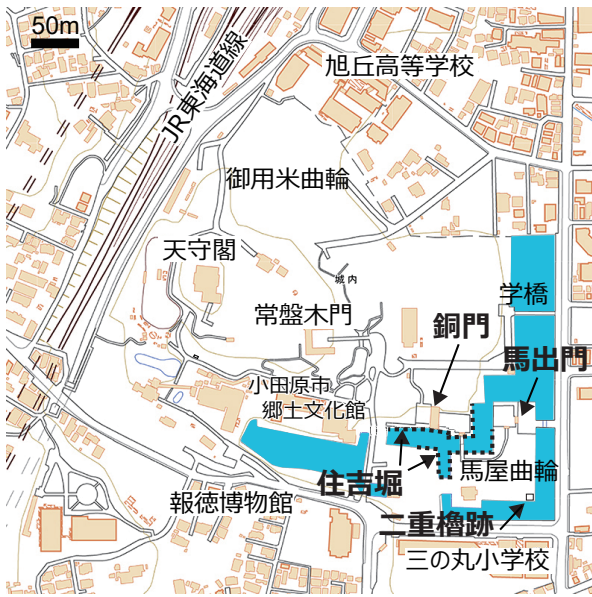


図1. 小田原城址公園周辺の地図. 太字の4つの建造物について、本文で紹介する。データは地理院地図を使用した。

石は真鶴町のJR東海道線より山側で採掘される本小松石です。本小松石は約18万年前の箱根火山の山麓で噴火した、本小松溶岩グループと呼ばれる噴出物で、安山岩よりもやや二酸化ケイ素が多いデイサイトと呼ばれる火山岩です。

一方、角石の右側の石(平石と呼ぶ)は斑晶鉱物も多く、空隙も多いことで特徴づけられる、通常よく見られる溶岩でした。こちらの石は、史跡 早川石丁場群から出土したものです(厳密

はじめに

今から25年以上前だったかと思います。知り合いの高校の地学の先生に、小田原城の石垣に使われている石材はどこかの石を使っているのかを聞かれた記憶があります。その時は、石材に対する知識もなく、箱根火山の石ではないかと軽く流しました。その後、総合研究「箱根火山」を担当して箱根火山の溶岩に詳しくなり、さらに小田原城で出土した石材の研究依頼を経て、小田原城址公園の石材についてだいぶ詳しくなりました。今回は、小田原城址公園で見られる石材(図1)について、紹介していきたいと思います。

馬出門

馬出門は2009年に復元工事が行われました。図2は外堀側から馬出門を眺めた写真で、図3は門の右側(北側)を拡大したものです。門の脇には左右とも共通して角石と呼ばれる、比較的大きな長方形の石材が使われています。通常の溶岩は、マグマの中で成長していた斑晶鉱物と、マグマの上昇に伴う減圧により、マグマ内の揮発性成分が気体になることで形成された空隙があるのが特徴です。しかし、馬出門の角石は空隙が少なくとも緻密で、さらに斑晶鉱物が少ないことで特徴づけられます。この

には、史跡に指定される前の2005年頃の林道工事で大量に出土した石)。早川石丁場群で出土する溶岩は、30~25万年前に箱根火山の山麓で噴出した米神溶岩グループ、もしくは25~23万年前に噴出した江之浦溶岩グループで、いずれも斑晶鉱物を多く含む安山岩です。角石と平石の違いを見比べてみて

ください。なお、馬出門で使用されている石材についての概略は、馬出門入って左にある看板に紹介されています。

二重櫓跡

二重櫓跡は、2010年に復元されたもので、馬屋曲輪の南東端に位置しています。両側から石段で登ることができ、ここではこの石段で使用されている石材に注目します。図4は二重櫓跡に向かって右側の石段ですが、石段の下部と上部とで石材が異なることがわかりでしょうか。下部と上部の境界付近を撮影したものが図5です。左下は表面がやや平滑なのに対し、右上側は凸凹しています。左下は産地不明ですがおそらく箱根火山起源の安山岩、右上は小田原市風祭付近で採掘される風祭石です。風祭石は、東京軽石をもたらした6.6万年前の箱根火山最大級の噴火で噴出した火砕流が堆積してできたものです。小田原市の入生田から風祭付近では火砕流堆積物の厚さが100 m近くに達し、その熱と自重で弱固結したものです。適度に軟らかく、加工しやすいことから江戸時代よりも前から石材として



図2. 馬出門の全景。



図4. 二重櫓跡の石段。

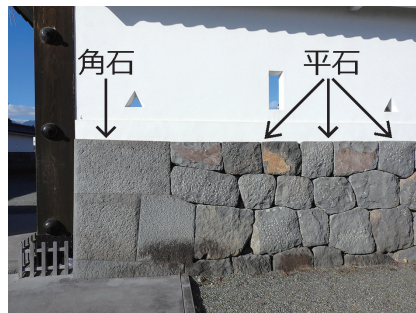


図3. 馬出門の右側(北側)。



図5. 二重櫓跡の石段の拡大。

使われてきました。二重櫓跡の風祭石は、風化と表面に苔がついていることで、観察には不向きです。きれいな風祭石は、城址公園内にある小田原市郷土文化館の2階に展示されているので、そちらをご覧ください。

すみよしぼり 住吉堀

住吉堀および住吉橋は、大正関東地震(1923年)で崩壊し、一度は埋められてしまいました。復元工事を行うにあたり、埋められた石材の発掘調査が行われ、石材に残された刻印を記載し、さらに石垣の破片を回収したとのことです。この破片が当館に持ち込まれ、岩石学的解析を行いました。その結果、住吉堀で使用されていた石材に、米神溶岩グループもしくは江之浦溶岩グループの溶岩がかなり多く使用されていたことが分かりました。実はこの結果が大変興味深いことだったので。

小田原城は、戦国時代、すなわち北条氏の時代は石垣を持つ城ではありませんでした。本格的に石を使用しはじめたのは江戸時代に入ってからです。1624年に徳川秀忠が小田原城に隠居する計画が浮上し、小田原城の再整備が計画されました。その際に石垣が造られることになったのですが、当時の記録では、現在の南足柄市塚原から小田原市久野にかけての、明星ヶ岳いんきよから明神ヶ岳みんじんがたけの裾野の溶岩を採石して使用することになっていました。実際に塚原の山中には、当時土佐藩でこの地域に石場を持ついたとされる、山内家の家紋である三つ葉柏みつばがしわの刻印が残された石があります。さらに小田原城の御用米曲輪ごようまいくわ周辺の発掘でも、三つ葉柏の刻印が残された石が見つかっています。この御用米曲輪周辺で出土した石を全岩化学分析した結果、明星ヶ岳火山由来であることがわかり、記録と調和的であることが判明しました。なぜ小田原城に近い早川石丁場群や、船で運べば楽な真鶴半島の石を使わなかったのでしょうか。これらの石は江戸城で使用するために採石されたもので、小田原城には使わなかったためではないかと推測していました。ところが、実際に住吉堀の石垣の石を調べると、早川石丁場群の石材の

組み合わせである、米神溶岩グループもしくは江之浦溶岩グループの石材が多いことが判明し、これまでの説と矛盾が生じました。矛盾の原因も推測になりますが、1633年に寛永小田原地震かんえいという大地震があり、当時の小田原周辺の街は壊滅状態になったとされています。そのため、緊急事態で早川石丁場群の石材を使用したのではないかと考えています。あるいは早川石丁場群以外で米神溶岩グループもしくは江之浦溶岩グループの溶岩が分布する場所から採石を行った可能性も考えられます(例えば箱根板橋ふじやまの富士山や江之浦海岸等)。なお、住吉堀の石垣に関する詳細データは、山下(2025)をご覧ください。

住吉堀の石垣を間近で観察することは難しいですが、このようなストーリーを持つ石材が使われていることを思い馳せながら眺めてください(図6)。

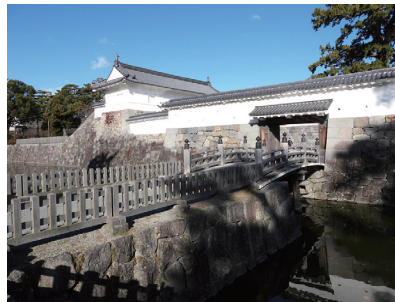


図6. 住吉堀と住吉橋。

あかがねもん 銅門

銅門は1997年に復元されました。住吉橋を渡って左に折れると、大きな銅門が正面に見えます(図7)。門の脇を構成する大きな角石は、馬出門で見たものと同じ本小松石です。門に向かって左側の石垣は、箱根火山起源の石材と思われまます。石材の全岩化学分析を実施したわけではないですが、住吉堀と続く石垣であることや、石の表面の様子からも間違いないと思います。問題は、銅門に向かって右側の石垣です。この石垣には今まで見られなかった特徴があります。それは灰色の溶岩の中に丸みを帯びた白色の石が取り込まれていることです(図8)。灰色の溶岩の部分は、安山岩です。白色の部分は、安山岩のマグマが地下から上昇する際に、周りにあった石を取り込んでしまったもので、捕獲岩ほくわくがんと言い



図7. 銅門。



図8. 銅門北側の石垣に見られる、捕獲岩を含む蔵王火山由来の安山岩。

ます。捕獲岩は溶岩では珍しいものではないのですが、箱根火山の溶岩に限っては、捕獲岩がほとんど含まれないのです。ということはこの石材は箱根火山以外の火山から持ってきた安山岩ということになります。実は銅門に箱根火山以外の石材を使用したことは、銅門を出て左にある看板で紹介されており、その給源は山形県の蔵王火山であることが書かれています。ちなみにこの蔵王火山由来の安山岩は、山形城の修復でも使われていることが報告されています。

おわりに

今回は馬出門から近い4つの石造物を紹介しましたが、小田原城址公園内や報徳二宮神社にはまだまだ興味深い石材があります。別の機会で紹介できれば幸いです。この記事を参考にしながら、小田原城址公園を石材視点で巡ってみてはいかがでしょうか。

参考文献

山下浩之, 2025. (8)住吉堀で確認された刻印石の理化学分析. 小田原市文化財調査報告書第217集「史跡小田原城跡二の丸住吉堀修景整備事業報告 史跡小田原城住吉堀」, pp.306-311. 小田原市教育委員会.

常設展に新しい昆虫の展示ができました

わたなべ きょうへい
渡辺 恭平(学芸員)

はじめに

2026年2月に、当館の常設展に新しい昆虫の展示が加わりました(図1,2)。この展示は多くの皆様からご寄附いただいたお金を活用したものです。まずはご寄附、ご支援いただいたすべての方々に、お礼を申し上げます。今回は、展示の紹介に加え、準備の裏話(主に苦労話)を書かせていただきます。

新しい展示の内容

今回新たに加わった展示は、大半が日本の昆虫で、神奈川県を含む日本各地で採集された標本が主役です。当館の1階生命展示室にある「昆虫の世界」の標本は当館を代表する昆虫展示ですが、この標本は多くが海外産の昆虫で、日本産の昆虫は少数しかない、という課題がありました。今回増えた展示は、その欠けている日本の昆虫を大幅に増やしたものです。これで名実ともに「世界」の昆虫を見られるようになりました。

展示は従来の縦型の標本箱配置ではなく、テーブル型の展示台に並べ、上から覗き込む形としました。小さいものも多い日本の昆虫を間近で見ることができ、上のフレームから照明を照射することで、標本箱内にできる「影」を減らすこともできました。標本の劣化対策として、ケースの表面は紫外線を遮断する強化アクリルで覆っています。

追加した昆虫標本は9箱で、うち6箱が分類群(チョウやハチといった仲間)を「実物昆虫図鑑」形式で並べたもの、残りの3箱が「害虫と益虫」「外来種と地球温暖化で増えている昆虫」「希少な昆虫」というテーマごとに並べたものです。限られた予算でなるべく多くの昆虫を展示するため、なるべく多くの箱を展示できるように工夫しました。

昆虫の展示準備はたいへん

昆虫の展示は、実は結構たいへんです。標本が脆い上、虫害やカビ害、紫外線による退色等を防ぐため、通常はきちんとした標本箱に入れて展示する必要(制約)があります。これにより、見せ方の



図1. 「実物昆虫図鑑」で並べた新しい昆虫展示6箱. 図2の3箱もあわせ、ルーペは現在取り外している。

自由度が下がります。また、一つひとつが小さく、おまけに種数が多いために、並べる作業はそれらのラベルの準備とあわせ、膨大な作業を要します。大きな石や骨を一つ置くだけで、ある程度のスペースが埋まる分野を見ていると、本当に羨ましく思います(その分野の苦労はあるでしょうが…)。

展示業者の方々と展示台の設計を終え、展示できる箱数が決まったら、期日までに展示を完成させます。収蔵庫から標本を出してきて並べますが、狭隘化した収蔵庫では、資料を探し出すのも一苦労です。収蔵棚が溢れている上に、作業スペースすら物に占拠されている始末です。結局、会議室まで標本箱を運び、必要な標本を抜き出す作業を重ねました。もちろん、会議等が無いタイミングを見ての実施です。ボランティアの支援もあり何とか終わることができましたが、

やはりバックヤードの狭隘化問題は作業効率を著しく下げており、解決が必要です。

標本を並べる際には、昆虫の形や大きさ、色合いや分類群、生態のバランスを見て配置します。また、種名ラベルが標本に隠れないようにする必要もあります。展示する標本を選んだあとは、その配置をあれこれ悩みながら進めます。どうしてもあと1種増やしたい場合等、ミリ単位で標本を動かしたり、展示する虫をより小さな種に入れ替えることもあります。近くから覗き込む展示台により、種名ラベルを小さくできた点は、多くの標本を並べる上で大いに助けとなりました。

標本が並び、種名ラベルも配置できたら、希少種の産地情報を伏せる作業があります。標本の針にはその虫の採集データを書いたラベルがついていますが、希少種の場合、この情報が乱獲等に



図2. テーマごとに並べた新しい昆虫展示3箱.

悪用される恐れがあります。そのため、希少種のラベルと、希少種と同じ産地で採れた標本のラベルは、全て裏返しにする作業をします。数が数だけに、結構たいへんですが、必ずすべき作業です。

終わらない解説の準備

当館の常設展示の解説は、全般的に比較的少なめです。解説が多いと読む方も疲れるので、まずは感じたり、楽しんだり、興味を養ってもらえれば良いという考えからです。新しい展示にも、その考えを踏まえてあまり解説を加えていません。一方で解説を読みたいという方がいるのも事実です。そこで、ウェブサイトに解説を掲載することにしました。最近

は図鑑をはじめ良い普及書も多く、インターネットで種名を検索すればかなりの情報を得ることができるため、解説はコラム調を主とし、多少マニア目線の砕けた内容としてみました。

私は比較的文を書くのが好きで、多少の解説であればすぐに書き終わるのですが、今回の展示解説を書いていると、いつまでたっても書き終わりません。それもそのはず、後でカウントしたところ、寄附受付時の目標である標本640個体(64は虫好きのラッキーナンバー)を遥かに上回る、723種1,262個体の昆虫が展示に加わっていたのです。当初予定の倍くらいの時間を要して、なんとか解説を書き上げたときには、ホッとしました。



図3. チョウの標本を追加する様子.

既にある展示も少し更新

せっかくの機会ですので、生命展示室に既にある海外産標本の展示にも手を加えました。今回の展示追加の一つの目的に、狭隘化が限界を迎えている収蔵庫にある標本を少しでも展示室に出し、収蔵庫に空きスペースを生み出すことがあります。そのため、乱舞するチョウの展示に、大幅に標本を追加する作業を、ボランティアの協力を得て行いました(図3)。箱を壁から外し、裏に積もった大量のホコリを掃除機で吸い、重いフタを開け、バランスを見ながら標本を並べるのはたいへんな作業でしたが、チョウの数は約300個体ほど増え、収蔵庫の標本棚が2段空きました。

さらに、ささやかですが、いくつかの標本を追加しました。有名な素数ゼミであるジュウシチネンゼミ、ジャガイモの大害虫コロラドハムシ、ヘルマン・ヘッセ著の「少年の日の思い出」で有名なクジャヤママユの仲間2種、背中に人面模様があり、キイキイと音を立てることからも不吉の象徴とされるヨーロッパメンガタズメの計5種です。どこに追加してあるか、探してみてください。

おわりに…展示がお披露目されてからもたいへん

特別展や企画展は、展示が完成後、オープンする前に、様々な確認作業が行えます。常設展の更新の場合、大規模なものであれば休館を伴って時間を確保できますが、今回の部分改修では、展示台の設置後、すぐにお客さんにお披露目されることになりました。今回の展示では、拡大して観察できるルーペを展示台につけていましたが、その一部が持ち去られてしまったこと等、少々のトラブルがありました。オープン後しばらくは担当として気をもむ日々が続きました。

この号が皆様のお目に留まるころには、きっと新しい展示も常設展の一部として、すっかりなじんでいると思います。まだご覧になっていない方は、ぜひ当館にお越しください。今後も、一つひとつ改良を重ね、皆さんに楽しんでいただける展示に育てていければと思いますので、引き続きよろしく願いいたします。

催し物のご案内

特別展「しらべて分かった! 里山にくらす動物たち」

2026年7月18日(土)～11月8日(日)

休館日 / 9月7日(月)、8日(火)、14日(月)、24日(木)、28日(月)、
10月5日(月)、13日(火)、14日(水)、19日(月)、26日(月)、
11月2日(月)、4日(水)

哺乳類、鳥類などの里山の生きものの魅力やくらしぶりの変化などを分かりやすく解説します。多様な生きものについて大人も子どもも楽しく学べる展示を通じ、この先の未来、人と野生生物がどのような関係を築いていくべきか、改めて考えるきっかけを提供します。



催し物の詳細や最新の情報は、当館ウェブサイト、および公式X(旧Twitter)でご確認ください。

生命の星



[公式サイト] <https://nh.kanagawa-museum.jp/>
[公式 X] @seimeinohoshiPR [混雑情報 X] @seimeinohoshiCI
[問合せ先] 企画情報部 企画普及課 TEL: 0465-21-1515

ライブラリー通信 墓石は小田原で?!

つちや さだお
土屋 定夫 (司書)

戦後文学の評論で活躍した本多秋五^{ほんだしゅうご}という文芸評論家をご存じでしょうか?

1908年(明治41年)、愛知県猿投村、現在の豊田市に生まれた本多氏は10代の頃より文学作品を書き、東京帝国大学国文科を卒業し、様々な評論活動を行います。詳細はここでは触れませんが、興味のある方はぜひ調べてみてください。

本多氏は1947年(昭和22年)に神奈川県逗子市に居を構えます。実は35年ほど前に知人から本多家の庭に木を植えるので手伝えと言われ訪ねたことがあります。その時の氏の温厚なまなざしを今でも覚えています。あの時の木は大きくなったことでしょう。

さて、1981年(昭和56年)に氏の姉が亡くなり、一周忌までに墓を建てたいと考えます。姉の望みは沢庵石^{たくあんいし}ほどの自然石一つというものでした。逗子と鎌倉の石屋を見て回りますが見つかりません。墓地は郷里^{きょうり}に買ってあったので、そちらでも探しますがどうもしっくり来ない。

小田原に住んでいた作家の尾崎一雄に石屋のことを聞くと「小田原の市を箱根の方へ出外れて、新幹線のガードをくぐった先の、板橋というところにある」と教えられます。この石屋の創業は明応年間(1492年)という老舗でした。そこで彼は枕より少し大きい石を手に入れます。

しかし長男から「こんな石なら、丹沢へ行けば、いくらでもゴロゴロしている。」と言われ、丹沢へ出かけることになりました。丹沢湖に流れ込む河内川^{こうちがわ}の河原でこれかと思う石を見つけますが、どうにも運べないので、小さめなものを5～6個拾って帰ります。それらを小田原の石と較べてみると、丹沢のものは小さくて見劣りがしたそうです。結局、小田原で手に入れたものを墓石にすることになったのでした。この経緯は「墓と墓石」という随筆に書かれています。(『一閃の光』所収)

石は国外からもやってきますので、どこに運ばれても不思議ではありませんが、小田原で手に入れた石が愛知県で墓石になると何かしらの縁を感じてしまいます。

本多夫妻も郷里で眠っていますが、どうやら墓石はそちらで見つけたようですね。



筑摩書房 1993年

《事前申し込みの講座》

詳細は、博物館ウェブサイトや催物案内をご覧ください。

- 博物館学入門～展示の企画と模型の製作～[博物館]
日時 / 7月11日(土)・25日(土) 10:00～15:30
対象 / 大学生～成人 12人
申込締切: 6月30日(火)
- きのごさがし[博物館および館近くの山林内]
日時 / 7月18日(土) 10:00～15:00
対象 / 小学生～中学生 25人
※小学1年～3年生は保護者参加必須
申込締切: 7月7日(火)
- 初めてのシダ～シダ植物の観察ポイント～[博物館]
日時 / 8月2日(日) 13:30～15:30
対象 / 中学生～成人 12人
申込締切: 7月21日(火)
- あなたのパソコンで地形を見る(教員優先)[博物館]
日時 / 8月4日(火) 10:00～15:00
対象 / 教員を優先とした成人 12人
申込締切: 7月21日(火)
- いろいろな羽根を観察してみよう[博物館]
日時 / 8月9日(日) 10:00～11:30
対象 / 小学1年～3年生とその保護者 10組40人
※保護者参加必須
申込締切: 7月28日(火)
- 羽根の持ち主さがしに挑戦[博物館]
日時 / 8月9日(日) 13:30～15:30
対象 / 小学4年～6年生・中学生とその保護者 10組40人 ※小学生は保護者参加必須
申込締切: 7月28日(火)
- 先生のための地層学入門[博物館]
日時 / 8月14日(金) 10:00～15:00
対象 / 教員 12人
申込締切: 8月4日(火)
- 日本にゾウがいたころを知ろう[博物館]
日時 / 8月16日(日) 10:00～16:00
対象 / 高校生～成人 20人
申込締切: 8月4日(火)
- 日本の変った姿の動物、デスマスチルス類ってどんな動物?[博物館]
日時 / 9月13日(日)・10月25日(日) 10:00～15:00
対象 / 高校生～成人 15人
申込締切: 9月1日(火)
- これ何の骨? ハ虫類の骨を調べてみよう[博物館]
日時 / 9月19日(土) 10:00～12:00
対象 / 小学4年生～成人 10人
申込締切: 9月8日(火)
- きのご観察と同定[博物館および館近くの山林内]
日時 / 9月21日(月・祝) 10:00～15:30
対象 / 小学4年生～成人 25人
申込締切: 9月8日(火)
- 絵本『せいめいのれきし』片手に展示を楽しむワークショップ[博物館]
日時 / 9月26日(土) 10:30～16:00
対象 / 成人 12人
申込締切: 9月15日(火)
- 古生物学入門～中軸骨格(頭骨を除く)編～[博物館]
日時 / 10月3日(土) 10:00～15:00
対象 / 大学生～成人 12人
申込締切: 9月22日(火・休)
- 用水路や川の生き物を調べよう
[県東部または県西部(未定)]
日時 / 10月4日(日) 10:00～14:00
対象 / 小学3年生～成人 20人
※小学生は保護者参加必須
申込締切: 9月22日(火・休)

自然科学のとびら

第32巻2号(通巻123号)

2026年6月15日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館

館長 佐藤 武宏

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

TEL: 0465-21-1515 FAX: 0465-23-8846

編集 本杉 弥生(企画普及課)

印刷 株式会社あしがら印刷

© 2026 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.